

國語學文化研究

第

五

號

第五號目次

西鶴近松用語雜考

佐藤鶴吉(一)

宇津保物語

の作者及び年代に就いて

金ヶ原亮一(二四)

家持の假名管見

高林誠一(二五)

古今集の左註について

安田喜代門(二五)

詞章研究

萬葉集

澤瀉久孝(二七)

源氏物語

宮田和一郎(二七)

徒然草……………(有)加藤武彦(三七)

平家物語……………(木)穎原退藏(九七)

天曆時代の假名遣……………吉澤義則(二七)

海道記の證本と其の成立……………後藤丹治(二九)

漫語……………同 人(二三)

彙報……………同 人(二六)

中等教員檢定試驗問題……………(二六)

雜誌要目……………(二七)

編輯後記……………同 人(二九)

次 號 豫 告

前 號 目 次

濁點源流考……………吉澤義則

萬葉の作者に就いて……………澤瀉久孝

和泉式部傳……………岡田希雄

和泉式部の研究……………岡田希雄

草枕について……………木枝増一

藤原定家の歌……………谷 鼎

家持の假名管見……………高林誠一

鬼貫の俳論……………小林正治

詞章研究……………

詞章研究……………

萬葉集 (澤瀉久孝 鈴鹿三七)

源氏物語 (宮田和一郎 島田退藏)

萬葉集 (澤瀉久孝 鈴鹿三七)

源氏物語 (宮田和一郎 島田退藏)

大 鏡 (北西鶴太郎 鈴鹿三七)

平家物語 (額原退藏 木枝増一)

謡 曲 (市川寛 能勢朝次)

淨瑠璃 (加藤順三 能勢朝次)

義門法師と政方大人……………岡井慎吾

抄物の言葉に就いて……………吉澤義則

徒然草の研究……………宮脇善住

海道記の證本と其の成立(上)……………後藤丹治

國語と文化研究

第五號

西鶴近松用語雜考 (一)

佐藤 鶴吉

國語の歴史的研究、殊に語彙の史的考察といふ見地から、西鶴の俳諧乃至浮世草子及び、近松の戯曲の文章を眺めて、問題とする興味のある單語、特有の文法、造語、成句等について、いささか考へたことを記して見よう。もとより雜考であるので、研究といふほどの系統だつたものではない。時には疑問のままの雜語を掲げて、大方の教をお願いいたしたいと思ふ。もしそのうちに、百に一つでも、從來の學者の説を補ふことが出来るならば、せめてもの幸とする所である。

(一) あざを握る

雪女五枚羽子板に「春の司の佐保姫君、霞の衣當流仕立て、しやんと着てなす四尺八寸。あざを握つて押せく、押込め乗込め米俵、でつかり踏まへた大黒く。大黒舞と囃されて」(中の卷)

とある。木谷氏の大近松全集註釋辭典には、「あざは麻苧綱とも云ふが、別に特種の當込みの語もあるが、わざと註を省く」としてある。第一「あざ」が問題である。西鶴の「大矢數」卷二に

紅の幕を通すや時鳥

元 春

此度天下一段の夏

西 鶴

かるたはあざ打出す風涼しくて

不 琢

夜半の鐘聲更けて行雲

笑 爲

とある「あざ」は、「かるた」の用語であることが知られる。更に、「大矢數」の卷四に行くと、

商ひ口や打散らす露

そも繩やこなたに握る果報也

阿座一枚は洛中の内

とあるので、「あざ」が一枚二枚と數へらるべきかるた札であつて、綱の類でないことが確かに知れる。尤も右の句の「握る」は、すぐ上の「繩」の縁で言つたものに相違なく、それから「阿座」と附けてゐるから、「あざを握る」といふ一種の意味を持つた成句が當時一般に通用されてゐたことが、ここでも察せられる。尙、俚言集覽に「あざの握り殺し」といふ語が出てをり、「博語」(戰國魏策)

王獨不見^レ夫博者用^レ梟耶欲^レ食則食欲^レ握^レ則握^レ〔注〕不^レ食也食也食行^レ碁握^レ不行也ニギルと云もやる
と云も今の博語に同じ」とある。更に「あざ」の條には「博類のカルタにあり俗に蟻字を用う蟻は
卽蟻字何義を知らず又欺也」とある。この握[○]と云ふ語が、果して戰國策にまで縁を持たせねばな
らぬものであるか。とにかく、「あざ」の札を握つて大事にしてゐることではあるらしい。然
らばその「あざ」は特に大事な札でなくてはならぬと思はれる。翻つて宮武外骨の賭博史を見ると、
如何にも「あざ」は「めくりカルタ」札四種類中の、最優等の青札に屬し、その青札の一を「あざ」
といひ五十點の價值があるのだといふ。惜しいことに「あざ」といふ語義が明かでない。よつて、
以上の用例と俚言集覽、賭博史の説とを合せ考へて、自分は「あざ」には「幸福」、「果報」、「利得」
などの意が寓せられてゐるものと斷じたい。「あざを握る」とは、その果報利得を取り逃さぬやうに
といふ心で、近松も之を大黒舞の歌の文句に擬してあやなしたのではあるまいかと思ふ。大黒舞の
繪を見ると、打出の小槌を持つて舞つてゐるので、ますくそんな心持がせられる。大職冠四に
「そろを脇から二くすじの、三馬あざがけしのぎつつ」とあるも、この「あざ」であらう。

(二) あつたばこしゆもない

丹波與作上「やれくくあり様達は、あつたばこしゆもない。傍輩共とかげごくに、道中双六
打つて、沓の銀程してこませふと思ふたに、人呼廻つてなんでやる」とある。之を「あつたことで

ない、「途方もない」と解するのは、結局の意味としては、誤りではないにしても、「あつた」を「有つた」、「在つた」とするのは如何であらう。自分は、「あつた」は、「あたかしましい」「あたしただるい」「あたぶのわるい」などの「あた」、即ち接頭語の「あた」に、更にいま／＼しいといふ心を強めて言はうとする語勢から、「あつた」と促音が挿入されたものであると考へる。「奇怪」を「きつくわい」、「憎い」を「につくい」といふ例のやうに。つまり「あたばこしゆもない」で、「ほこしゆもない」度合の更に強くなつた語であると思ふ。碁盤太平記に「こちは相州の馬方、三條堀川迄早追の通しに來ました。鎌倉の町原郷右衛門と云ふ、人から狀ことづかつて草臥ながらほつこしふもない」とある。これも馬子の言葉であるが、この「ほつこしふもない」は、「あた」又は「あつた」がないかはりに、「ほこ」を「ほつこ」と言つてゐる。「しふ」と書いてあつても「しゆ」といふやうに發音するのであらう。元來、「ほこしゆもない」は、「ほしくもない」(欲シクモナイ)の意で、「うれしくもない」「おもしろくもない」などと、感情を表すのに形容詞の否定を用ひることがあるが、その類の語と見られる。

(三)あはれかし

これは、「あはれ」と「かし」その二つの感動詞が結合したに過ぎないが、かういふ風に、使用された例は、あまりに見かけない。「さぞかし」などの類推である。曾我會稽山四「あはれかし龜菊に

逢ひたい事や」

(四)あやかし

これは謡曲の「舟辨慶」に「此の御船にはあやかしが附いて候」とあつて、海上の妖怪とされてゐるが、西鶴では、その「あやかし」が陸上までも上つて來てゐるからおもしろい。而もよく腰のまはりに附き纏ふくせものとなつてゐる。俳諧「虎溪の橋」に「芝居の見せ物すかぬ黒雲、あやかしが附いて候腰の廻り」。又武家義理物語一の四「人さへ行けば鞍の狂ひ出づるを段々申し上ぐれば、金藏何とも思はず。さては是にて誰か始めの程腰を撫でける。(中略)おのれは矢がらを入るゝ役なるに、無用のはたらき、其科今思ひ知れど焼捨てけるに、煙の中にて最期わきまへ狂ひぬ。物のあやかし、かやうの事ぞ」。尤も物種集上卷に「産後の宿に拂ふ惡風、餅舟にあやかしが附いて候よ」とは、また舟の縁を求めてゐると見える。

(五)あやぎれ

一代女一、「國主の艶妾」の條に「女は都に増して何國を沙汰すべし。一つは物越程かはいらしきはなし、是わざとならず王城に傳へていひならへり、そのためしは八雲立國中の男女、言葉のあやぎれせぬ事のみ多し」。同六、「夜發の附聲」の條に「九十五六程も立並び、聲のあやぎれもなく、おはりよ／＼と泣きぬ。是かや聞傳へし孕女(うぶ女)なるべしと氣を留めて見し中に、むごいかか様と

銘々に恨み申すにぞ」と、赤坊の幽靈か何かのことを叙してゐる。「問のとぎるること」と國語辭典にあるが、それではどうも徹底しない。前例の引用文に物越[△]ともあるから、言語音聲に限つて使ふ語であると思はれる。言語の匂[△]ぎり、發音の明快なこと、一般に言葉づかひのきれいなことをいふのであらう。「あやぎれ」の「あや」は、物の「あやめ」、「あい[△]ろ」などいふ、「あや」又は「あい」と同系の言語構成分子と見られる。

(六)あらち

「分娩の時出づる生血」と解されてゐるが、一般に刃傷などの爲めに、出血の甚だしいことにも用ひ、文字も「荒血」と當ててあるがそれでよいと思ふ。薩摩歌下「如何なる人の何故に、刃の上の往生か。産のあら血か世の中は、餘所の事とは思はれず」とあり、兩吟一日千句の西鶴句「胎内にさまるあらちの告ふかく」などは分娩に關する用例であるが、卯月潤色中「三十五日の新精靈、荒血の上で死したる人」とは、剃刀で斬られたお龜のことである。又、西鶴の「大矢數」二の十二「強盜(ガンドウ)中間智恵より起る下桝、山はあらちの殺してもとれ」とあるのも、刃傷沙汰である。

(七)ありきやう(ありけう)、ありきやうがり

萬歳の歌子詞であるが、あいきやう(愛敬又は愛嬌)といふことか或は「あら、興ある」などの約か。戀八卦柱曆下「徳若に御萬歳と、御代も榮えましますありきやうありけるあら玉や、年立ち返

るあしたより」とある。「ありきやうがり」は織留四「伊勢神樂の勸進禰宜、鹿島の事ふれ、あたまに烏帽子被くほどの者は知らぬといふ事なく、ありきやうがり、舞ひまひまで、入用の時は爰に行きて」と、烏帽子折の家に行くことが叙してある所にある。又、源氏烏帽子折二「門松かげの小鼓や、ありけう有りける新玉の（中略）萬歳、鳥追とりぐに」ともあるので、恐らく萬歳の異名として當時用ひたものであらう。「ありきやう何々」と歌つて來る者といふので、やがてそれが名稱のやうになつたと解される。或は、「ありきやうある」を「ありきやうがる」とも歌つたか。

(八) ありつべしう

「さもありつべし」など終止にいふのを、「美しう」、「さかしう」などの類推から、副詞的の連語にしてしまつたところが一寸おもしろい。尤もこの例は、下文以外にまだ見當らない。薩摩歌上「さもありつべしう言ひければ、三五兵衛合點して」

(九) あんごのとう」と「伊勢講の當屋」

日本永代藏六、「身體かたまる淀川のうるし」の條に「ある時石清水八幡宮を申しおろして、あんごのとうを執り行はれ、目出度き事山々なりしに、この行事はその亭主の心持大事なり」とある。有朋堂文庫本の頭註に、「あんごのとう——安居の頭にて男山の神事也」とある。安居は佛敎^幸。

大日本國語辭典などにも出てゐる通りであるが、自分には「とう」の頭が問題である。

佛語で佛道修行の僧侶が行ふことであるのを、八幡宮は宮寺であるので、神事として往國語辭典に
る。鶴岡八幡宮で建久二年四月十五日に始めて安居を結んだといふことは、東鑑(十一)に使ふ語
る。さて頭については、目次紀事に伊勢講のことを記して「伊勢講、俗間三人或五人、常合心約
其日、聚其家、謀其事謂講、其日多用三首日及十六日、今月今日其所聚家稱頭人、是首長之
謂也、頭人輪轉設酒食饗講中之人、云々」とあるによつて、この伊勢講に於ける頭人、即ちその神
事を行ふ宿のことであると類推される。それで「その亭主の心持大事なり」といふ意味も、安居を
結ぶ儀式、或はその僧侶に對する待遇上の事などに關するものと察せられ、次に「萬の義をしき
と思へば、忽ちむそくする事なりしに」と永代藏に續けてゐる心持もうなづかれる。尙、伊勢講に
於ては、この頭人をする家を當屋といつたと見えて、大矢數卷三の二十四に「味噌汁の味が替つた
鳥部山、伊勢講の當屋立ちさらで飲み」などがある。

(一〇) いしがきくづれ

「石垣崩、石がきのくづれ。轉じて零落したる人の稱」と國語辭典に解されてゐるが、その轉じた
方の意義が少し考へものである。一體「石垣」といふのは普通名詞の石垣でなくて、京都の遊女町
祇園の町名であらう。男色大鑑六「情の大盃潰膽丸」の條に「祇園町石垣上八軒家穴奥(こつはり)
八坂清水の茶屋をさがし行き」。二代男八「袂にあまる心覺」の條に「石垣町の二階騒ぎ、祇園町

の十替踊」。置土産^三「思はせ姿今は土人形」の條に「明暮四條河原に通ひけるに(中略)毎日の道中なるを、石垣の遊女ども飯喰ひさして走り出、此面影を見れば」などある。近松の長町女腹切上に「私は四條石懸町、井筒屋と云ふ茶屋に花と申す勤の者」とある石懸町は「いしかけ」であるが、「石垣町」のことと思はれ、石垣も「いしがけ」「いしがき」兩方に當時呼んでゐたらしい。そこで一代女六「暗女は晝化物」の條に「京の石垣崩れなりと、さる御牢(浪)人衆の娘御なりと、新町で天神してゐた女郎の果なりと」と並べていふ意味が理會される。新町は大阪の遊女町、その「なれの果て」といふに對して、京の「石垣崩れ」といつたまでのことで、普通名詞としての普遍性を持たしめることすらどうかと思はれる程度の語である。まづ精々のところで、「落ちぶれた遊女」といふことは出来ようが、「零落したる人」とはどうであらう。

(一一) いしんぢよ

壽門松上「てて御様は隠れもないいしんぢよなり」とある。物堅い人、一徹頑固な者にいふこの事であるが、近松にこの外の用例があるかどうか。語源的にいふと、「いしんぢよ」——「石丈」で、石は堅く、丈は男子の通稱であるところから來たといふのが瑠璃天狗の説である由。今特にこの語源を考へるだけの材料がないが、例の大矢數四の三十八に

膏育にすえ(ゑ)て給(は)れ烟の山

それから先は石千代イシチヂョになる

他の家を承つて名付親

とある。「烟の山」は大きなお灸のことであらう。「石千代」とは、西鶴の單なる機轉と見るべき程度のもので、語源説の資料とすべきではなからう。しかし、「石丈」に對して比較にならぬといふほどでもないやうに思ふ。

(一二)いせぶし(伊勢節)

伊勢節といふ名は、高野博士の「日本歌謡史」にも一寸見當らないやうであるが、下の記事は「間の山節」の一名であることを證するといつてよからう。西鶴織留四の三「間の山の乞食、むかしは遊女の如く小袖の色をつくして、味噌こし提げたるもをかし、其姿には似ざりき。中にもおたまおすぎとて、ふたり美女あつて、身の色を作り、三味線を引きならし、あさましや女の末と、伊勢節をうたひける。」又日本永代藏四「仕合せの蒔錢」の條に、「相の山袖乞までも心ながく、道者の機嫌をとりて饑ゑす寒からず、身に絹布をかざり、連れ引きの三味線に乗せて、あさましや心一つといふ一節、いつ聞きても替らず、この一里の内殊更に慰みにもなれり」とあるのは、前文の傍證とすに足りる。

(一三)「いたり」と「いちばん」

「いたり」は「至り」で、物事の「至れり盡せり」の程度状態にあることをいふ。この語を冠らせて、熟語を構成することが可なり自由に行はれたやうである。俗つれ／＼「今の難波の至下屋敷に、中二階の簾捲きあげ」。永代藏四「觀世太夫一世一代の勸進能ありしに、金子一枚宛の棧敷を京大阪に續きては堺へ取りける。至穿鑿これにて知れぬ」とは、贅澤極まる物好みのこと。置土産五「南江のいたり茶屋に遊んで、つら／＼鐵眼建立の唐づくり詠めて」。男色大鑑八「夜の編笠はしれ者、いたり床にしかけ、伽羅の燒き殻下されませいと」。一代女一「此中の古歌を大納言殿にお尋ね申したが、拙者聞いた通り在原の元方に極まりたなど、いたり物語二つ三つ」とは、いたりばなしと同じで、思はせぶりに話し上手に物語ることである。この他「いたり染め」、「いたり大盡」、「いたり風」、「いたり末社」、「いたり料理」などの語も行はれた。これに比して「いちばん」は「一番」で、やはり物の最上級を意味するが、「いたり」ほごには造語を見ない。唯物品に冠らせていふのなら普通であるが、下のやうな用例は、いさゝか注意するに足りる。置土産二「親の代より木綿賣りける銀子を貯めてかためて、見ば一番牛の寝たほご譲り渡しぬ」とは、極めて大きい牛といふのであらう。織留五「一番女房の大所の勝手にあふ者、給銀四十五匁から五十目に極めて置きしに」とは、最も働きのある。第一流の女中のこと。萬文反古二「一番男の六尺揃へて」とは、むやみに丈の高い、屈強な男のことと見える。

(一四)五つの借物——天が下に五つ

一代男四の三十歳の條に「世は五つの借物、取りに來た時、閻魔大王へ返さうまで、合せて三十年の夢云々」とある。この「世は」といふ文字に注意されるが、俳諧「物種集」上卷では「火宅の内に留守もおかずや」といふ句に對して、西鶴は「されば身は五つのかり物計にて」と續けてゐる。尙、仙臺大矢數、延寶六年刊、大淀三千風が仙臺梅睡庵で吟じたもので、西鶴はこれに跋を書いてゐる）には、「五體五輪皆かり物の浮世町、つかひすごして跡はからたび」といふ句が出てゐる。「世は五つの借物」は姑く措いて、「身は五つのかり物」といふのは、この三千風の「五題五輪」の句によつて、五輪であると斷することが出來よう。即ち五輪とは佛教でいふことで、地・水・火・風・空の五要素、五大とも稱される。これ等五つは、物質元素として法界に周遍し、吾人の肉體も亦これらに依つて成り、死すれば復この元素に歸するといふ。眞言宗の「五輪成身」の所談もこの理に基くものとせられる。そこで身は五つのかり物と言つたのである。近松にも「五つの借り物」の用例があることは、木谷氏の註釋辭典で知られるが、まだ自分はその本文を突きとめて見ない。(但し氏が「人體を組成する木火土金水の五行」と註せられたのは失考である。)更に西鶴に返つて「世は五つの借物」を吟味して見るに、やはり「身は五つのかり物」と同一意味に考へてよいであらうと思ふ。身といひ、世といひ、聯想は同じである。唯最後に日本永代藏卷一の劈頭の章に「ひそかに